

地中海古代都市の研究 (134)

メッセネにおける劇場調査報告 2010 (2) ローマ時代スケエネの復元試案

正会員 ○岩田千穂^{*1} 同 吉武隆一^{*2} 同 伊藤重剛^{*3}
同 安井伸頭^{*4}

9. 建築歴史・意匠—4. 西洋建築史
ギリシア メッセネ 劇場 舞台建物

1. はじめに

昨年度は、スケエネの遺構と部材の現状報告と若干の復元考察を報告した¹⁾また、前稿では吉武が、劇場から出土した柱頭部材について詳しい分析をおこなった²⁾本稿では、前稿までの分析結果を踏まえ、劇場のうちローマ時代のスケエネについて、建築部材の組み合わせからオーダーを復元し、さらにスケエネ全体の復元試案を提示する。

2. メッセネの劇場におけるスケエネの現状

メッセネのスケエネは、プロスケニオン、舞台、スカエナエ・フロンス、パラスケニオン、ポストスケニンで構成される。スケエネは全幅46.60mで、このうち、舞台の背景となるスカエナエ・フロンスの部分は、全幅29.47mである。スケエネはポロスの躯体に大理石の化粧材をはめて仕上げられていたと考えられる。しかし、現在は化粧材が失われており、ポロスの躯体が露出している。スケエネの壁は、ニッチ床面から高さ約1.4mまでしか残っていない。

スカエナエ・フロンスには、中央に半円形ニッチ、東西に矩形ニッチ、合計3つのニッチがある。舞台は木造であったと思われる、床板などは失われている。現在は、舞台下が露出した状態である。ここにはヘレニズム時代のスケエネの基礎であったと思われるポロスの石列や、ポロス製の円柱、石灰岩の石列などが残っている。

3. スカエナエ・フロンスのオーダーの復元

遺構や部材の現状から、スケエネ建設に使用した部材は、他の建物の部材を転用したり、前代のスケエネ部材を再利用したりしたものであると考えられる。事実、実測したスケエネの部材の寸法や細かな形状には、ばらつきが見られる。しかし、大まかなオーダーの違いや寸法の違いに注目すると、各部材は以下のように分類される。

①柱身は、高さにより4種類に分類される。

②礎盤は、その上面直径と上に乗る円柱の底面直径との関係から、4種類に分類される。

③柱頭は、コリント式、イオニア式、ロータス・アカンサス式柱頭2種の計4種に分類される。

④アーキトレーブ・フリーズ部材が高さにより2種に分類される。

⑤ゲイソンが装飾の有無により2種類に分類される。

このように部材を2～4種類に分類できるので、スカエナエ・フロンスは2層であった可能性が高い。また、スカエナエ・フロンスにはニッチがあるので、同じ階層に高さが異なる2種類の柱があった可能性が高い。2種類の柱とはすなわち、ニッチに据えられる柱と、スケエネの躯体上に据えられる柱である。つまり、オーダーの組み合わせが2通り、柱の組み合わせが4通りとなる(図2)。

柱身は高さで4種類あることがはっきりしており、最も信頼できる分類である。そこで、柱頭と礎盤は4種類の柱身との関係で分類した。つまり、礎盤の上面直径は柱身の底面直径より大きくなり、柱身の上面直径が柱頭の底面直径より大きくなり、イオニア式柱頭だけは、底面直径が柱身の上面直径よりも大きくなる。以上の前提条件をもとに、推定すると、以下のようになる。

最も大きな柱身は、平均高さが4.057m、上面直径が平均0.515m、底面直径が平均0.574mである。これに合う柱頭は底面直径が平均0.400mのコリント式柱頭で、礎盤は上面直径が平均0.596mの部材である。2番目に大きな柱身は、平均高さが3.524m、上面直径が平均0.446m、底面直径が平均0.491mである。これに合う柱頭は、底面直径が平均0.404mのロータス・アカンサス式柱頭で、礎盤は上面直径が平均0.526mの部材である。3番目に大きな柱身は、平均高さが2.906m、上面直径が平均0.395m、底面直径が平均0.411mである。これに合う柱頭は底面直径が平均0.339mのロータス・ア

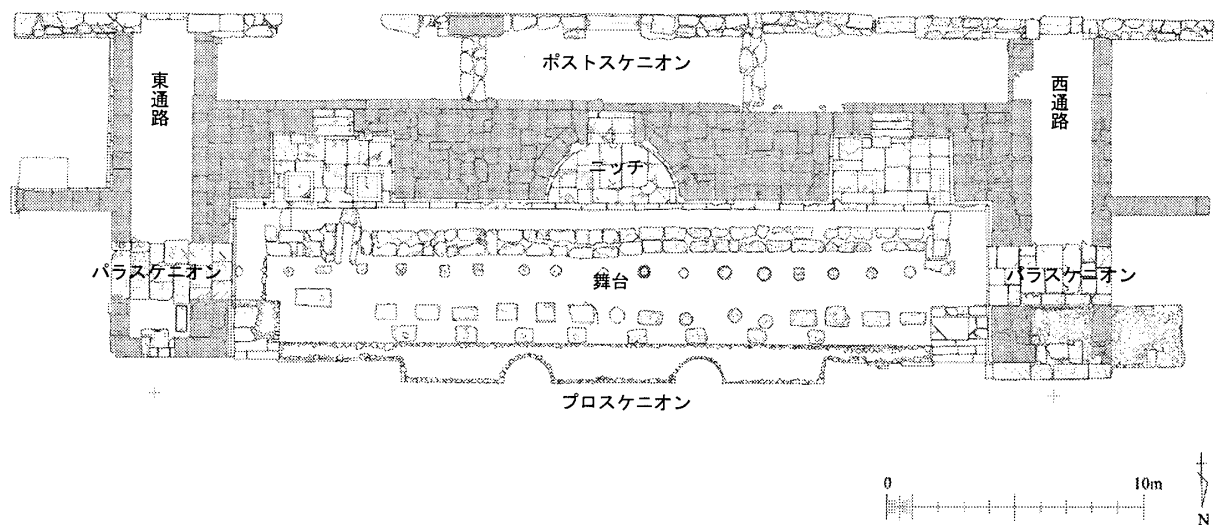


図1 スケーネの現状平面図(色つきの部分はポロス石材)

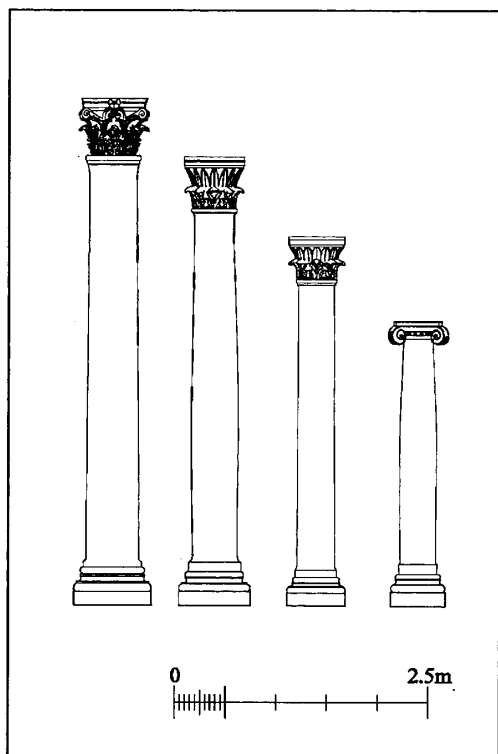


図2 柱の組み合わせ

カンサス式柱頭で、礎盤は上面直径が平均0.443mの部材である。同様に、一番小さな柱身は、平均高さ2.329mで、上面直径が平均0.313m、底面直径が平均0.378mである。これに合う柱頭は、底面直径が平均0.365mのイオニア式柱頭で、礎盤は上面直径が平均0.406mの部材である。

ウィトルウィウスは、著書の中で2階建て及び3階建てのスカエナエ・フロンスの各部寸法の比例関係に言及している。³⁾それによると、スカエナエ・フロンスは1階の高さが高くなり、2階の高さが低くなる。これは多くの古代ローマ時代のスカエナエ・フロンスにも

表1 スカエナエ・フロンスのオーダー各部の寸法

一階のオーダー各部の寸法					
ニッチ			ポデューム		
	単位(m)	データ数		単位(m)	データ数
プリンス幅	0.728	2	プリンス幅	0.698	3
プリンス高さ	0.135	2	プリンス高さ	0.131	3
礎盤直径	0.596	1	礎盤直径	0.526	3
礎盤高さ	0.240	1	礎盤高さ	0.187	3
円柱底面直径	0.574	4	円柱底面直径	0.491	7
円柱高さ	4.057	3	円柱高さ	3.524	1
円柱上面直径	0.515	3	円柱上面直径	0.446	5
柱頭直径	0.400	2	柱頭直径	0.404	4
柱頭高さ	0.567	2	柱頭高さ	0.457	4
アーキトレイブ底面幅	0.384	3	アーキトレイブ底面幅	0.384	3
フリーズ上面幅	0.553	2	フリーズ上面幅	0.553	2
アーキトレイブ高さ	0.360	4	アーキトレイブ高さ	0.360	4
フリーズ高さ	0.239	4	フリーズ高さ	0.239	4
アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.599	4	アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.599	4
コーニス高さ	0.304	8	コーニス高さ	0.304	8
二階のオーダー各部の寸法					
ニッチ			ポデューム		
	単位(m)	データ数		単位(m)	データ数
プリンス幅	0.616	6	プリンス幅	0.564	5
プリンス高さ	0.117	6	プリンス高さ	0.112	5
礎盤直径	0.443	7	礎盤直径	0.406	5
礎盤高さ	0.181	7	礎盤高さ	0.166	5
円柱底面直径	0.411	3	円柱底面直径	0.378	6
円柱高さ	2.906	2	円柱高さ	2.329	1
円柱上面直径	0.395	5	円柱上面直径	0.313	6
柱頭直径	0.339	4	柱頭直径	0.365	5
柱頭高さ	0.429	4	柱頭高さ	0.148	5
アーキトレイブ底面幅	0.330	2	アーキトレイブ底面幅	0.330	2
フリーズ上面幅	0.390	2	フリーズ上面幅	0.390	2
アーキトレイブ高さ	0.181	2	アーキトレイブ高さ	0.181	2
フリーズ高さ	0.113	2	フリーズ高さ	0.113	2
アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.293	2	アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.293	2
コーニス高さ	0.252	12	コーニス高さ	0.252	12
			シマ高さ	0.197	4

あてはまり、メッセネの劇場の場合も同様であろう。アーキトレイブ・フリーズ部材とゲイソン部材は大きさが明らかに2種類あることから、大きな部材が1階、小さな部材が2階に相当すると考えられる。

以上のことから、スカエナエ・フロンスのオーダー各部の寸法を平均値で算出した(表1)。

4. スケーネの復元

前章の分析を元に、スケネの復元考察を行う。

4-1. スカエナエ・フロンスの平面(図3)

スカエナエ・フロンスに立っていたと考えられる柱に着目すると、完全に残っている柱が7本見つかって

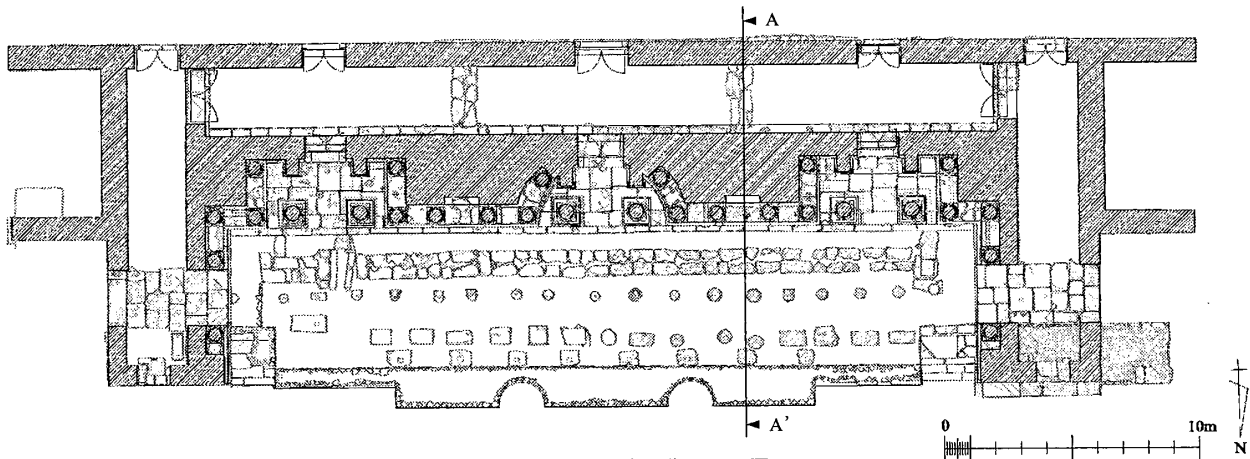


図3 スケーネの復元平面図

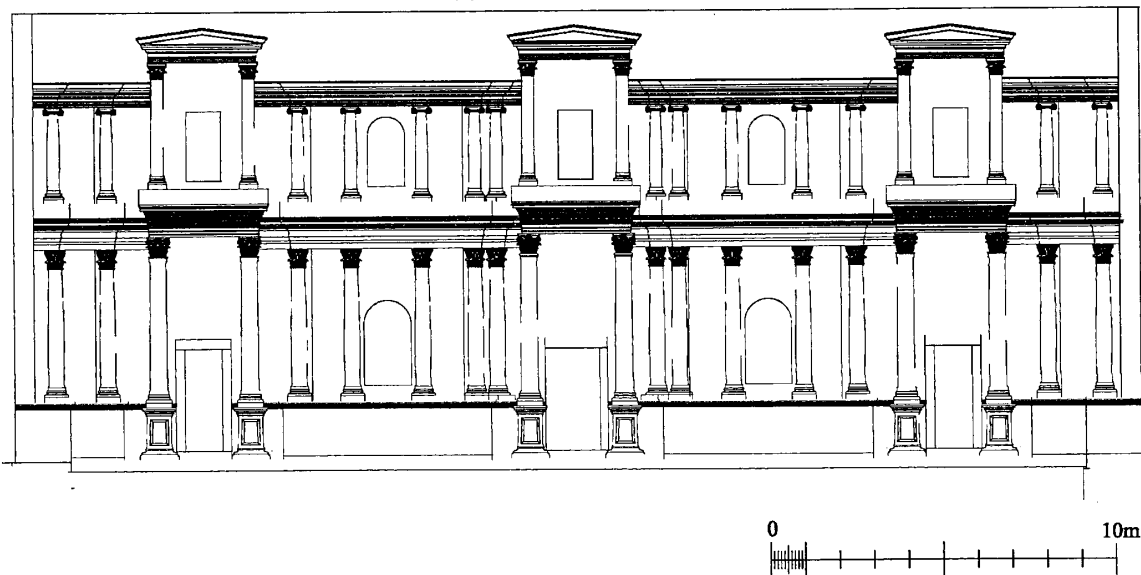


図4 スカエナエ・フロンスの復元立面図

いる。また、高さにより4種類の柱が存在する。他に多数の柱身部材破片が出土していることを考えると、さらに多くの柱身があったことが分かる。他方、アーキトレイブ・フリーズやゲイソン部材の中に円弧がついたものがある。以上のことから、ニッチ以外にも柱が配置され、それらがニッチ側面にも回り込んでいたことは間違いない。

ニッチとニッチとの間の列柱に配置されたアーキトレイブ・フリーズは、全長1.77m~2.05mである。他方、ニッチとニッチとの間のポディウム幅は6.06mである。これらのことから、ポディウム正面の列柱は3柱間であったと考えるのが妥当である。

一方、各ニッチの床面には、2つのペDESTALが据えられた設置痕が残っている。東ニッチでは、ペDESTALの部材が立ったままの状態で見つかった。ここには、2本ずつ柱が立っていた。また、東西ニッチの出入り口両脇に付け柱の跡が残っており、付け柱の柱頭

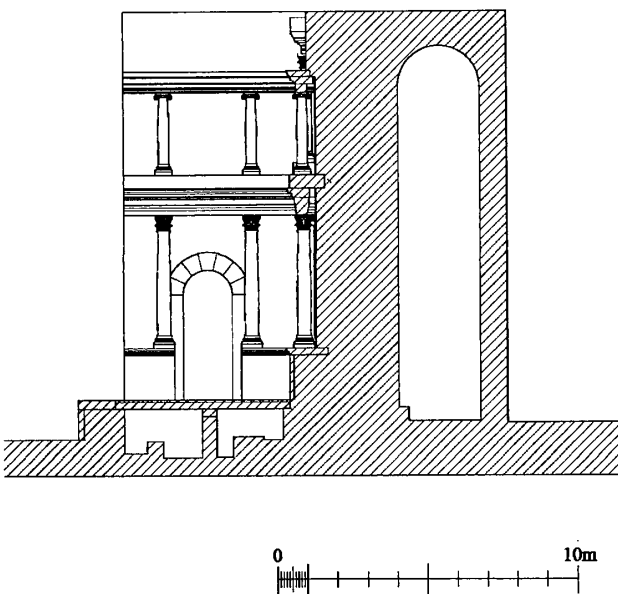


図5 スカエナエ・フロンスのA-A' 復元断面図

と礎盤の部材が出土している。したがって、付け柱は壁から前方へ迫り出すように設置され、ニッチ側面の柱は付け柱と連動して壁の前面に立っていたと推測した。付け柱とニッチ側面との間にはアーキトレイブ・フリーズ部材は無く、壁面にアーキトレイブ・フリーズ風の装飾が施されていたと考えられる。

全形が残るアーキトレイブ・フリーズ部材の中には円弧が付いているものがあり、その全長は2.96mである。したがって、半円形ニッチ側面のポディウム上に乗る柱は、この部材が届く位置、すなわち、ニッチ正面の隅に据えられた柱の中心から2.96mの位置に据えられたと考えられる。

4-2. スカエナエ・フロンスの立面(図4)

先述のとおり、スカエナエ・フロンスの建築部材は4種類のオーダーに分類できる。アーキトレイブ・フリーズやゲイソンが2種類しかないので、スカエナエ・フロンスが2階建てである。柱の高さが、4.999m、4.299m、3.633m、そして2.775mの4種類となり、かつニッチとポディウムとは、高さの異なる柱が立っていたと考えられる。他のスカエナエ・フロンスの例を見てみると、ニッチの中に立つ柱は、ポディウムに立つ柱と同じ高さであるか、より高くなっている。パルミラの劇場のスカエナエ・フロンスは、ニッチの柱がポディウムの柱よりも高くなっている⁴⁾ニッチの中に立つ柱が高くなるのは、ニッチをより豪華に見せるためであろう。

装飾のあるアーキトレイブ・フリーズ部材(部材番号66+1402)は、出隅の角部材であり、ニッチに立つ柱の上か、ニッチへ回り込むポディウムの出隅の柱の上のどちらかにしか置く場所がない。しかし、装飾のないアーキトレイブ・フリーズ部材で、ニッチ側面へ回り込むポディウムの出隅の上へ確実に乗る部材が見つかったので(部材番号68)、装飾のあるアーキトレイブ・フリーズ部材は、ニッチに立つ柱の上にあったことが分かった。したがって、ニッチに配置されたアーキトレイブ・フリーズだけが、豪華な装飾が施されていた。

4-3. 舞台(図5)

スカエナエ・フロンスのニッチの前面には、奥行き

約0.25~0.30mのステップがある。また、舞台下にはボロス製の円柱が約1.25~1.80mおきに19本、スクエネと平行な列をなすように並べられた状態で発見された。これらを床柱とし、ステップからプロスカエニウム・ウォールへ南北方向に床梁あるいは根太を架け、その上に床板を張ったと推測される。

4-4. パラスケニオン(図5)

舞台とパラスケニオンとの間には開口部があり、そこには扉あるいは堅枠が設置されていた痕跡が残っている。一般に、スカエナエ・フロンスの列柱は舞台側面にまで回り込み、舞台とパラスケニオンをつなぐ開口部の両側に1本ずつ柱が立っていることが多い。

4-5. ポストスケニオン(図5)

ポストスケニオンとスカエナエ・フロンスとは、ほぼ同じ高さまで立ち上がることが多い。当該劇場のポストスケニオンや通路には、2階へ上がるための階段の痕跡は見当たらない。ポストスケニオンと外部とを仕切る壁がどのくらいの高さまで立ち上がっていたかは明確でないが、今回の復元では、ポストスケニオンの天井高さは、スカエナエ・フロンスの高さと同じ2階分とした。

以上の分析から導き出した仮定と推定にもとづいて、復元平・立・断面図を作成した。

謝辞 本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金「ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の建築及び考古学的国際共同調査」(基盤(S)課題番号20226012)の助成を得た。

註

- 1) メッセネの劇場について、2009年に以下の報告がある。吉武隆一他「地中海古代都市の研究(128)メッセネにおける古代劇場調査2009(1)平面」日本建築学会九州支部研究報告(計画系)、長崎、第49号、585-588頁。セイン・ソクンティエ他「地中海古代都市の研究(129)メッセネにおける古代劇場調査2009(2)スクエネ」日本建築学会九州支部研究報告(計画系)、長崎、第49号、589-592頁。岩田千穂他「地中海古代都市の研究(130)メッセネにおける古代劇場調査2009(3)スクエネの部材」日本建築学会九州支部研究報告(計画系)、長崎、第49号、593-596頁。
- 2) 部材の詳細については、前稿を参照のこと。吉武隆一他「地中海古代都市の研究(133)メッセネにおける劇場報告2010(1)スカエナエ・フロンスの柱頭」日本建築学会九州支部研究報告御2010年3月。
- 3) ウィトルウィウス著、森田慶一訳注、『ウィトルウィウス建築書』東海大学出版、129-130頁。

4) Frank Sear, *Roman Theatres—An Architectural Study*, Oxford, 2006, pl. 111.

参考文献

- Margarete Bieber, *The History of the Greek and Roman Theater*, Princeton, 1961
 ウィトルウィウス著、森田慶一訳注、『ウィトルウィウス建築書』東海大学出版
 Frank Sear, *Roman Theatres—An Architectural Study*, Oxford, 2006

*1 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程2年
 *2 熊本大学大学院先導機構 特任助教 工博
 *3 熊本大学大学院自然科学研究科教授 工博
 *4 熊本大学大学院自然科学研究科 博士後期課程3年

Prof., Dr. Eng, Kumamoto University
 Postgraduate Student, Kumamoto University
 Assistant Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
 Postgraduate Student, Kumamoto University